

## 稲の花

雨宮菜央（埼玉県 星野高等学校 2年生）

「稲の花を何かに喩えて、私を納得させてちょうだい」  
私はそれを聞き、また「いつもの」が始まったと呆れた。曇天の、八月十四日のことである。

事の発端は、昼過ぎ。祖母と田んぼ道を歩いてきたときだ。ミンミンと鳴く蝉と、チロリロと鳴く松虫が、遠くで歌合戦している。そんなことを思っていると、後ろから聞こえた足音が止まった。

「ばあちゃん、何やってんの？」

私は振り返る。祖母の視線は、緑の絵の具をつけた筆を、下から上に向けてはらったような早稲を捉えていた。私も近づいて見る。黄緑色の実に、細長く、白いものが付いているのに気づいた。「これは？」

祖母は、少々訛った口調で言った。

「これは、稲の花だ」

驚いた。こんなでも花と呼ぶのか。私はそれをまじまじと見つけた。そんな私を見て、この後祖母は冒頭の言葉を言った。

即座に「もやし」と笑いながら答えた。「夕方までそこで考えてみ」と、冷たく返された。

私はガードレールに腰掛けて、視界の八割を占める青田を睥む。

足下から、小石を水の中に入れるような音が次々と聞こえる。私の脳内にアイデアが入られる音は聞こえない。

空を見上げた。灰色の絵の具を水で薄めたような雲が、のっぺりと広がっている。次第に、私の思考は昼ご飯のことになっていく。心なしか、泥の匂いが醤油の匂いに変わっていく感じがした。

祖母は、自身の手打ちうどん、祖父の特製トマトジュースのことも喩えてくれ、と試すような目つきで言っていた。

そのとき、私はこう答えた。

「手打ちうどんは……かまぼこより噛み後の余韻がある。トマトジュースは……ちよつとざらざらして、ほんのり蜂蜜の香りがある」

その回答で、祖母は満足そうに頷いていた。では、なぜ「もやし」がダメだったのか。基準がさっぱり分からない。少し回りくどく言えばいいのか？ もやしに何かを付け足せば……。

バサバサバサ

大きな羽音が、私の脱線した思考を断った。音のした方を見ると、白鷺が三羽、大きな青田の中で羽を休めている。白鷺といえど、祖父母宅の池の魚を食べた位しか印象に無い。しかしまばらに立っている三羽を見た時、私の脳内にアイデアが入れられる音がした。

「じゃ、言ってみなさい」

私を迎えに来た祖母が開口一番、あの問いの答えを催促した。私は、橙色の雲に向かって飛ぶ、三羽の大きな白鳥を見つめながら言った。

「青田の中で羽を休める白鷺」

祖母はすぐに頷く……と思ったが、祖母はなかなか首を縦に振らない。代わりに、独り言のように呟く。緑の葉を撫でる風に、こっそりと乗せるように。

「稲の花は、ひっそりと咲くんだで」

私は慌てて付け足した。

「……を、葉の隙間からしゃがんで見るようだ」

祖母は、満足そうに頷いた。